勇者が家にやって来た!!

晴山田 二十五朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者が家にやって来た！！

【Ｎコード】
Ｎ９８２８Ｙ

【作者名】
晴山田　二十五朗

【あらすじ】
この物語の主人公は普通に平凡な生活を送っている少年だった。
しかしある日、少年の家に別世界から来た、勇者と名乗る見知らぬ男が訪ねてきて平和だった日常が壊れ始めていく。
果たして男が別世界からやってきた理由とは？
そして、少年の運命は？

僕が初めて書く小説です。読みづらく、更新が不定期になるかもしれませんがよろしくお願いします。

第1話　勇者が家にやってきた

「潤太、私達、じゃあそろそろ行くからあとのことはよろしくね。夜更かししちゃだめよ、あと、それと、ちゃんと掃除はするのよ。」

「暑さに負けず、しっかりやれよ。」　今日は七月二十九日。夏休みに入ってまだ間もない。

俺の名前は、波瀬潤太（なみせじゅんた）。県立の東西南北高校に通っている高校一年生で、部活は特にやってない。家族は三人家族で父と母がいる。で、今日から二人はフランスへ二週間、結婚記念日の旅行に出かける。実は、くじ引きで父が、フランスへ二週間の旅二人分のチケットが当てたのだった。でも本当は結婚記念日は三ヶ月くらい先なのだが最近結婚記念日に旅行に行ってないらしくせっかくだからというので、そういう題目にしたらしい。まあ、俺の母親らしい行動でもあるが。

ちなみに、父は勝彦（かつひこ）、母は葉子（ようこ）という名前である。

うらやましいといえばうらやましいのだが、家に俺以外の誰もいないというのはとても嬉しいことでもある。

そうだ、まず、一人生活一日目として今日はエロ動画でも堪能しようか。うへへ、これから人生で一番楽しい夏休みになりそうだ。

ピンポーン　ピンポーンピンポーン

今いいところなのになあ。現在時刻午後三時十分、この前録画

した映画を見ていたところだ。題名は『きれいなカルガモの子』。かわいい名前だがグロシーンが多い。
仕方なくリモコンの一時停止ボタンを押して玄関へ行った。

ガチャッ

今俺の目の前にいるのは俺の知らないやつだ。身長は俺と同じくらいで、茶色がかった長めの髪の毛をしている。また、顔立ちはよく肌は白い。日本人？外国人？どちらとも言えそうな感じだ。

「あの、どちら様ですか？」
勇気を出して聞いてみた。

「僕は、別世界のプラナリアン王国から来ました勇者です。名前をアンクレット・デリー・ジムと申します。」

へぇ～、別世界から、ってなんだよそれ！しかも、プラナリアンなんてふざけた名前の国、しかも、自分のこと自分で勇者って言っちゃってるし！日本語話せるけど明らかに外国人の名前だし！
こいつの脳みそどうかしてやがる。精神科に行った方がいいだろう。

「じゃあ、とりあえずあなたは精神科にいくのがいいと思います。」

「精神科？ご冗談を、僕は至って正常ですよ。」

バタン！　カチャ

俺は面倒臭くなってきたのでドアを閉めた。さあＤＶＤの続きでもみよう。時間を無駄に使ってしまった。

「待ってください。話は最後まで終わってませんよ。」

ドアの向こうから必死に呼んでいるがこういうときは無視をするのがいいんだろう、関わって変なことに巻き込まれるのは嫌だからな。

あー、面白かった。やっとＤＶＤを見終わった。さて次はエロ動画でも見ようかな。

ピンポーン　ピンポーン

またか、せっかく今からお楽しみタイムになるのに、来たのがあいつだったら今度は警察に通報してやる。

ガチャ

だが、そこにいたのはあいつではなかった。もしかするともっとやっかいな奴かもしれない。

案の定、それは当たった。俺はいきなり相手に胸ぐらを掴まれ家の中へと押し戻された。そしてリビングまでいくと、いきなり腹を殴られ、床に倒れ伏してしまった。

「痛てぇ。」

「いいからそこでじっとしてろよ。」

男はそういうと、部屋の中を物色し始めた。うかつだった、俺は後悔している。玄関を開ける前に誰なのか確認しておくんだった。サングラスにマスクといういかにも怪しい格好だからそれなりの対処は出来たはずだ。

「やめろ。」

俺はそう叫んだが、目の前の奴が聞くわけない。それにあまりにも強く殴られたせいか痛すぎて動けず、止めにいくこともできない。

ついに男は部屋の引き出しから通帳を探しだした。くそ、俺が油断していたからこうなったんだ。

それから、男は俺のところに来て。ポケットからナイフを取り出した。

「目撃者は消しておかねぇとな。」

そして男はナイフを振り上げた。

俺は逃げようとするが、恐怖で体が動かない。

あー、俺の人生ここまでか、この十五年間長いようで短かったぜ。畜生、一回でもいいから彼女が欲しかった。実はまだ一回も付き合ったことないんだ。

でも、もし最後に願いがかなうのなら、こう頼みたい。

助けて、勇者様！

第2話　間に合った勇者

「そこまでだ、強盗犯。」

どこかで聞いたことのある声、そう、願いが叶ったのだ。

そう言うや否や、勇者は男の腹にパンチを与えた、その衝撃で男はナイフを落とした。俺はその隙をついてナイフを遠くに蹴った。このときは、何故か体が動いた。

「くそっ、あとちょっとだったのに。お前は一体何者だ？」

「えっ？僕ですか？僕はある国の勇者、兼、この少年の友達です。」

おい、俺はまだお前を友達だとは認めてねぇぞ！

「ちっ、こうなったら。」

男はポケットから、二本ナイフを取り出し、両手に持った。

てか、どんだけナイフ持ってんだよ！

もしかしてあなたナイフマニアですか？

「うおうっ！」

男が、勇者に襲いかかった。

「危ねぇ！」

俺はそう叫んだが全く心配には及ばなかった。

勇者は余裕の表情で、攻撃をかわし、両腕をすり抜けて、男の股間目掛けて蹴りをかました。

強い。

普通の人間にはできないような芸当だ。

男は、悶絶し、その場に倒れこんだ。

「ふー、なんとか間に合ったみたいだね。嫌な予感がしたから、見にきたんだ。」

「あの、さっきはゴメン。お前に精神科行けとか言って、俺、お前のこと信じなかったんだ。でも、さっきの戦いを見て、マジですげぇと思った。だから、お前のこと信じるよ。あと、助けてくれてありがとう。」

「別にいいよ。それより間に合ったからよかった。」

「そうだ、この男を警察に通報しないとな。」

俺がそう言うと勇者はなんとポケットから、ケータイを取り出した。そして警察に電話をかけ、事情を説明している。

へぇー、勇者の国にもケータイあるんだ。俺が感心していると、勇者が

「メアド交換しよう。」

と言ってきた。やっぱ、勇者の世界はよくわからん。しかもよく見るとスマートフォンじゃないか。それは、きれいな青色のケータイだ。

「わかった、じゃあ俺から送るわ。」

そして、俺は情報を送信した。

「じゃあ次は僕のばんだね。」

アンクレット・デリー・ジム　登録完了。

そうこうしてるうちに警察の人が来た。

「もしかして、この男は、君達が抑えたのか。」

警察官は、この状況から察するに当たり前のことを聞いてきた。まあ、無理もない。ナイフを二本も持った凶悪な強盗犯を素手で倒したのだから。

「正確には、この男を倒したのは、こちらの方です。僕なんかは恐怖で動けませんでした。」

俺は、改まった場面や目上の人と話す時は一人称が『僕』になる。こっちのが丁寧な気がするからだ。

「本当にすごいね。君達には、たっぷり礼をしないと、何故ならこの男は、これまで数々の強盗を犯した凶悪な犯罪者で指名手配されていたんだ。それで、我々警察はずっと捜査していたんだかなかなか手掛かりがつかめなくてね。でも、君達のおかげで犯人を捕まえることが出来てよかったよ。」

「いえいえ、命の危うい人を助けるのは、当然のことですから。」

勇者は微笑んで言った。

それからしばらく話し合った。

「じゃあ、そろそろ僕は、この辺で失礼するよ、これからも、

お気をつけて。」

警察官は、まだ気絶している犯人を連行し、帰って行った。

はあ、まったく散々な一日だったぜ。まさか、殺されかけるとは思ってなかった。

それから、勇者が来て助けてくれて、警察官が来て。長いような短いような、変な感覚だった。でも、警察官は優しそうな感じの人でよかった。もっと怖いイメージがあったから。

「ひとつ、お願いがあるんだけど。」

勇者は、不意に、そんなことを口にした。

第3話　勇者のお願い

「ひとつお願いがあるんだけど。」
勇者は、不意に、そんなことを口にした。
「お前は俺を助けてくれた命の恩人だからなんでも頼んでくれ。」
俺はこの一言により後々後悔するようになるとは思ってもみなかった。
「それじゃあ、お言葉に甘えて、
お願いしますここに住まわせてください。」
「はいはい、別にいいですよって、え！今なんて？」
「ここに住まわせてくださいって言ったんだけど、聞こえなかった？」
俺は耳を疑った、おいおいマジかよ。ここに住みたいだと！いくらこいつが命の恩人だからってそれはいくらなんでも無理な話だ。

あ、でも、さっきなんでも頼んでくれって言っちまった。

「ああ、確かに聞こえたが・・・
まあ、確かにお前は俺の命の恩人ですっげえ感謝してる。でも、悪いがその頼みを聞くことは無理だ。」

「何で？さっき、なんでも頼んでくれって聞いたんだけど。」

「すまんな、俺は一人暮らしじゃなくて、両親と三人で暮らしてるんだ。だから、それじゃあ迷惑になってしまうだろ。」

「ああ、やっぱダメか、ゴメンな、無理な頼みをして。」

「悪いな、願い聞いてやれなくて。」

「じゃあ、僕はこれで、短い間だったけど楽しかった。」

「じゃあな、達者でやれよ。」

そして、勇者はトボトボとまるで魂が抜けたかのように歩き出した。あいつには悪いことしたな。

でもなんであんなに落胆するんだ。あいつにも、プラナリアン王国っていう帰るべきところがあるんじゃないのか？

そうだ、せめてあいつがここに来た理由だけでも聞いみようじゃないか。

「おい、ちょっと待てよ。」

声を掛けたとき、ちょうど勇者は玄関のドアを開けようとしていた。

「どうしたの？」

「どうしてお前はそんなに落胆してんだ？お前にはプラナリアン王国っていう帰るべきところがあるんじゃないのか？」

「帰れないんだ。」

「え？」

何、帰れないだと、勇者なのに。

「何でだよ、何で自分の国なのに帰れないんだ？」

「実は、僕、自分で勇者って言ってるけど、それはもう、過去の栄光でしかないんだ。」

「いったい何があったんだよ、言える範囲でいいから教えてくれよ。」

「わかった。全部話すよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9828y/

勇者が家にやって来た!!

2011年12月15日23時53分発行